

番外曲〈泣不動〉覚書

石井倫子

三熊野の山伏が近江国園城寺にやってきて泣不動を拝みたいと所望し、常住院へと案内される。仏前に祈念する山伏の前に一人の童子が現れ、病に苦しむ師匠の智興の替りに自らの命を捨てようとした証空の志に、不動明王が感涙を流して証空の身替りになったのだと泣不動の謂れを語る。童子は自分こそ不動に仕える矜羯羅制吒迦の内の一つだと言いつけて姿を消す。やがて矜羯羅童子が現れ、不動明王が証空の替りに地獄へ連行された時の有様を再現し、不動明王の徳を称えるのである。これが番外曲〈泣不動〉のあらすじである。

え、とうしの出立。小袖・水衣・くろかしら。後ハふとうの仕立也。わきハ山ふしなり」と装束付の記事がある。また、宝山寺（般若窟文庫）蔵の坂東屋宛金春禅鳳自筆小謡本の転写本にも、〈泣不動〉という題で「ささなみや……」以下の第五段の「上ゲ哥」がそのまま収められており、室町後期には〈泣不動〉は比較的近い曲であったと想像されるのである。

この作品の素材である泣不動説話は中世以降広く人口に膾炙したもので、『今昔物語集』『発心集』『宝物集』『雑談鈔』『三國伝記』『曾我物語』『園城寺伝記』『寺門伝記補録』『元享釈書』『とはずがたり』と、実に様々な形で流布していた。ところが次に掲げる〈泣不動〉後場の詞章と同じ内容を語る説話は見当たらない。

ヲニノ抑是ハ明王の御つかハしめ矜羯羅とハ我事なり。扱も不思議や明王の冥途に至り、証空が魂身に替るその姿を鬼神ハ更に知らずして 証空を引提げ浄玻璃の鏡の前に引き向くれは  
上同／不思議やな鏡の面かき曇り、罪人の

影も見えず。かくて一日一夜ハ常闇となり果て、軽量の善悪留まりぬ。  
下シテ／こハいかにと見る所に。  
下同／すは／＼漸く霧晴れて。浄玻璃の面明くなりぬ。さて罪人の影を見れば。証空にハあらずして 降伏悪魔の大聖明王赫耀として映り給へハ。冥官冥主俱生神も冠を地に着けて礼拝する。

（元頼本により表記を一部改めた）  
後ジテ矜羯羅童子が証空の身替りとして地獄へ連行された不動明王の様子を再現してみせる場面であるが、既に天野文雄氏に指摘がある通り（『能の童子』、『観世』昭五・三）、ここで参考にするべきは『不動利益縁起』であろう。『不動利益縁起』には東京国立博物館蔵大原本と、それをもとに作られたらしい清浄華院蔵本「泣不動縁起」の二本があり、前者の制作は様式的に見て十四世紀半ば近くであろうと推定されている。現存の『不動利益縁起』は詞書四段・絵三段からなり、次のような構成になっている。

〔詞書一段〕 師匠の身替りとなる決意をし老母に別れを告げる証空。  
〔絵一段〕 a 証空の母の家の風景。

b 証空と老母との別れの場面。  
c 洗濯をする女房達。

〔詞書二段〕 証空を思う母の切々たる心情。

〔絵二段〕 d 智興の坊の風景。

e 付喪神を祀り転じ替えを行う安倍晴明。

〔詞書三段〕 身替りとなった証空の苦しみ。

証空の志に感じて涙を流す不動明王の奇特。

〔絵三段〕 f 病苦を受け苦しむ証空と感涙を流して壇上に落ちる不動明王の

画像。

g 証空の代りに閻魔廟に連行される不動明王。

h 不動明王の出現に驚き礼拝する冥官達。

i 矜羯羅・制吒迦と共に雲に乗って飛び去る不動明王。

〔詞書四段〕 智興・証空の師弟は共に命を救われる。不動明王への賛美。

詞書三段に対応する絵（f・i）は七紙もあって、この絵巻の上でも大きなウエイトを占めており、gの後ろ手に縛られる不動明王の姿などはユーモラスであると同時に強い印象を与えるが、g・iの地獄での不動明王の描写に対応する叙述が詞書には見られない。

おそらくこれらの場面は、絵巻を作るに際して当該説話の持つ「不動明王の靈験譚」としての性格を強調するために創作されたものであったのだろう。似たような例として、大般

若経書写の半ばで没した東大寺の僧能恵が獄鬼によって閻魔宮へ連行されるが、宿願を遂げるために閻魔王の許しを得て蘇生したという話を描いた京都・広隆寺蔵の『能恵法師絵詞』（十三世紀初頭成立）がある。

『能恵法師絵詞』の現存部分には、獄鬼に連行された能恵が閻魔王の前に到着した場面が描かれているが、能恵の形姿が没個性的であるのに対し、獄鬼・冥官らは大きくゆったりと生き生きとした表情である事から、興味の中心は、実際は閻魔宮やそれを取りまく種々の情景描写にあったのではないかと推測されている（『能恵法師絵詞』解題『新修日本絵巻物全集』三〇）。同じ事が『不動利益縁起』

の場合にもあてはまるとすれば、制作者の関心は蘇生譚よりもむしろ不動明王そのものにあつたと考えられる。『不動利益縁起』も唱導のためのテキストとして人々の目に触れる機会が多かったに違いない。「師匠の身替りとしての死と蘇生」という人情物的要素の強い説話を素材としながら、〈泣不動〉が不動明王の姿を舞台上に再現してみせる事を最大の眼目とした夢幻能形態の神能的な作品となつたのは、この絵巻が泣不動の靈験譚として享受されていた事を示していると言えよう。

泣不動説話の流布や『不動利益縁起』の存在が〈泣不動〉創作の契機となつたことは確

かであるが、それに加えて、当時不動明王は一般の人々にとって非常に身近な尊格であつたという点も押さえておく必要がある。

不動明王は大日如来の使者で、如来が教化し難い衆生を救うために恐ろしい姿をとつた（教令輪身）ものだとされる。我が国には空海によって請来されまず東密に広まり、次いで台密にも普及した。その後、我が国始まって以来の最初の外敵の攻撃ともいうべき元寇の際、敵国調伏のために不動明王を主尊とした修法（五壇法）が行われた事や、不動明王を中心仏とする修験道の普及などがきっかけとなり、南北朝から室町時代にかけて、不動明王を現世利益を授けてくれる神だとする、庶民レベルでの不動信仰が浸透していったのである。また、黄不動（園城寺）・青不動（青蓮院）・赤不動（高野山明王院）のいわゆる三不動をはじめ、不動明王の画像・彫刻類には名作が多く残されており、利剣と絹索を手に持ち火焰の中に立つ忿怒の姿も広く知られていた。〈泣不動〉以外にも、不動明王が工藤祐経を調伏するという〈調伏曾我〉のような能が作られているが、これらは「実際に不動明王を見てみたい」という当時の人々の素朴な願望を反映した作品だと言えるのではないだろうか。

（東京大学大学院博士課程）